

ガールスカウト 100 周年記念式典 挨拶

2021 年 10 月 10 日

本日は、多くの皆様のご協力とご支援によりまして、
日本のガールスカウト運動 100 周年記念式典
並びに CAC100 アワードの表彰式を開催できますことを、
心より御礼申し上げます。

1909 年、ボーイスカウト運動に接した少女たちが、
ボーイスカウトの創始者であるベーデン・ポウエル卿に
「Something for Girls, too」 私たち、少女たちにも活動させてほしい
と直接訴えたことをきっかけに、
イギリスでガールガイド・ガールスカウト運動が始まりました。

以来、ガールスカウト運動は、
少女と女性のエンパワメントを目的とするノンフォーマル教育の運動として、
全世界 152 の国・地域に広がり、会員は 1000 万人を超えるに至っています。

日本には 1920 年、イギリスからやってきた英語教師によって
「ガールスカウト」の種が蒔かれ、
途中、戦争で一時、活動が途絶えた時期もありましたが、
今日まで 100 年間に亘り、ガールスカウト運動が続いてきました。

これはひとえに、全国各地で、地域に根差したガールスカウト活動を
地道に続けてきてくださったガールスカウト会員の先輩諸姉、
そしてそうしたガールスカウトの教育の価値を認め、サポートしてくださった
多くの支援者・協力者の皆様のお力によるものと存じます。

この場をお借りして、改めて心より御礼を申し上げます。本当にありがとうございます。

さて、今、世界中の人々が、新型コロナウイルスのパンデミックや気候変動問題、
さらには格差の拡大といった地球規模の課題に直面し、
どうすれば持続可能な未来を描くことができるのかを、模索し続けています。

こうした課題は、一国では解決できませんし、先進国だけでも解決できません。

また、政府だけで解決できるものでもなく、
世界中の企業や民間団体、アカデミア、
そして私たち市民一人一人が当事者となって、
解決に向けた具体的な一歩を踏み出さない限り、変化はもたらされません。

そこで今、世界中の、そして日本中のガールスカウトが、
多様性が尊重され、より包摂的で持続可能な社会を実現するために、
SDGs の取り組みを進めています。

特に、ガールスカウトが、当事者として、強い意志をもって取り組んでいるのが、
SDG の 5 番、ジェンダー平等を実現しよう、という目標です。

この目標は、私たち日本のガールスカウトにとって、特に切実です。

今年 3 月に WEF が発表したジェンダーギャップ指数では、
日本はいまだに世界 156 カ国中 120 位という最下位クラスです。

以前に比べて、日本でも女性の社会進出が進展したとはいえ、
世界では、それ以上のスピードでジェンダー平等に向けた取り組みが進んでいるということです。

特に、「政治」と「経済」の分野での男女の格差が深刻です。

私たちは、こうした格差を生み出す原因の一つに、
日本の社会に深く染みついている
ジェンダーバイアスの問題があるのではないかと考えています。

知らず知らずのうちに、「女の子はこうあるべき」
あるいは「女子はこういうことはしてはいけない」といった、
ジェンダーに基づく固定観念に縛られていないか、
私たちは日々の行動や思考を再点検する必要があります。

政治の世界にしろ、ビジネスの世界にしろ、人為的な数合わせではなく、
女性自身が、自らの希望に基づいて様々な可能性を追求でき、
その結果として、政治やビジネスの場で指導的な立場につく女性が増えていく、
というのが本来目指すべき姿であると考えています。

そのため、私たちガールスカウトの役割は、
主体的に考え、行動する力を持つ少女たちを育て、
社会の各層で多様なリーダーシップを発揮できる女性を社会に送り出すことです。

多様性や包摂性を備えた持続可能な社会を実現するため、
私たちガールスカウトの役割はいまだかつてなく重要になってきていると感じています。

コロナ禍で体験した様々な困難も、それを乗り越えたという経験とともに
私たちの将来の成長の糧となります。

100周年を迎えたこの時に、
今の時代におけるガールスカウトの価値や意義を十分に発揮できるよう、
全国のガールスカウトが一丸となって、声を上げ、
アクションを起こしていくことを再確認し、私からの挨拶とさせていただきます。

ありがとうございました。